ガザ日記

ジェノサイドの記録

DON'T LOOK LEFT

A DIARY OF GENOCIDE

ATEF ABU SAIF

FOREWORD BY CHRIS HEDGES

イスラエルがパレスチナ自治区ガザへの爆撃を始めた2023年10月7日から本書は始まる。その日から著者と家族、そしてガザのすべての人々に長く困難な避難の旅が強いられていく。いつ果てることもない空爆、外部との連絡もライフラインも絶たれるなか、自らと愛する人々の生命をつなぐために、誤ることのできない選択を次々と迫られる。
パレスチナの地で、いま、人々に何が起きているのか。爆撃下の大地で、作家である著者が文字を綴り、時にボイスメッセージで出版社に送り続けた日記を、世界11言語で緊急出版。

936
W9
ff

アーティフ・アブー・サイフ
中野真紀子 訳

ガザ日記

ジェノサイドの記録

横浜市立大学学術情報センター
007304756
受入

地平社

ビラールに

Copyright © Atef Abu Saif and Comma Press, 2023
First published in Great Britain in the English language by Comma Press, 2023

序文

忘れない者の痛み

クリス・ヘッジズ
（ジャーナリスト。元「ニューヨークタイムズ」戦争報道記者）

数多くのパレスチナ人の作家やジャーナリストや写真家が、イスラエルによるガザ侵攻の中で、少なくない犠牲者を出しながらも決然と、このジェノサイドの恐怖を私たちに伝えようと行動している。彼らは、最後には、殺人者たちのつむぎ出す虚構を打ち破るだろう。

戦時下で文章を書いたり写真を撮ったりすることは、抵抗であり、信念の行為である。彼らが確信するのは、いつの日か――その日を彼らが見ることはないかもしれないが――言葉や映像が、同情や、理解や、義憤を呼び覚まし、知恵を授けるときが来ることだ。彼らは事実を列挙するだけでなく（もちろん事実は重要だが）、失われた人々やコミュニティのたたずまい、神聖さや悲嘆までも記録にとどめる。彼らが世界に伝えるのは、戦争とはどんなものか、その貪欲な殺戮への渇望に捕らわれた者たちを襲う苦痛、他者のために自己を犠牲にする者と、そうでない者がいること、飢えや恐怖はどんなものか、死はどんなものかだ。子どもたちの泣き声、母親たちの慟哭、野蛮な産業暴力に対する日々の闘い、泥や汚物や病気や屈辱にまみれた勝利などを伝達する。だからこそ、作家や写真家やジャーナリストたちは、イスラエルのような戦

争を仕掛ける侵略者たちの標的となり、抹殺される。彼らは、侵略者が葬り去り、忘れ去りたい悪事の証人だからだ。彼らは嘘を暴く。墓の中からでさえ、殺人者を糾弾する。それゆえ、イスラエルは一〇月七日以降にガザで、少なくとも一三人のパレスチナの詩人や作家、少なくとも六八一人のジャーナリストを殺したのだ。

私はかつて、戦争報道の記者として中央アメリカ、ガザを含む中東、アフリカ、旧ユーゴスラビアを二〇年にわたり取材した。徒労感と義憤という、慣れっこになった感情も経験した。自分は十分な仕事をしているのだろうか、あるいは危険を冒す値打ちがあるのかとさえ疑ったこともある。それでも続けてきたのは、何もしないことは加担することになるからだ。報道するのは、関心を持つからだ。少なくとも、殺人者が自分の罪を否定するのを難しくすることができる。

ガザで活動するジャーナリスト、作家、写真家たちは、多くがイスラエルによって意図的な標的にされ、ハエのように死んでいく。彼らの死は、かつての同僚の死と同じように、私に取り憑いている。私は自分自身の死に語りかける。よく夢の中で、時には悪夢の中で、生きている人に語りかけるのと同じように。もう戦争を取材することはなくなったが、私はパレスチナ人たちの記憶と勇気に敬意を表したいと思う。彼らの声に耳を傾け、彼らの姿を心に刻む。決して忘れないと誓う。彼らは私を取り囲んでいる。そうしたパレスチナ人の中にあるとき、今は亡き、かつての同僚たちの姿を私は見る。

ギリシャの詩人イオルゴス・セフェリスは、自分の国がナチスに占領されたとき、「最後の停車駅」という詩の中でこう書いた。

私たちの心は、殺された友人たちの原生林だ
私がおとぎ話やたとえ話で語りかけるとすれば
それは、君にはそのほうが聞きやすいからだ
そして恐怖は語られない
あまりにも生々しいからだ
無言で、はかないものだからだ
忘れない者の痛みは
日ごと眠りの中に滴り落ちる

アーティフがイスラエルの暴力に遭遇したのはこれが初めてではない。彼が生後二カ月のとき、一九七三年の戦争（第四次中東戦争）が起こった。「それ以来ずっと、私の人生は戦争の連続だ。人生というものは二つの死の間の保留状態であり、それと同じように、パレスチナという存在は、幾多の戦争の間の一時的な保留の状態なのだ」と彼は書いている。二〇〇八年から

二〇〇九年にかけてのイスラエルのガザ侵攻の間、彼は妻のハンナと二人の子どもと一緒に自宅の廊下で二二日間にわたって寝泊まりした。イスラエルの爆撃と砲弾から身を守るためだ。「戦争の記憶というのは妙にポジティブだったりする。何しろ記憶があるということは、生き延びたということだから」と彼は記す。

彼は作家のする仕事をしていた。同じガザ出身のリファアト・アル＝アルイールもそうだったが、彼は一二月七日に兄弟姉妹や四人の子どももろとも殺された。ガザの彼らのアパートが空爆されたからだ。欧州地中海人権監視団（Euro-Med Monitor）によれば、リファアトは故意に狙われており、「ビル全体の中で正確にそこを選んで爆撃された」。その数週間前から、リファアトは「複数のイスラエル人のアカウントからオンラインや電話で殺人予告を受け取っていた」。

リファアトは、ジョン・ダン［一六～一七世紀のイングランドの詩人］の研究で博士号を取った作家で、この一一月に公開した「もし私が死なねばならぬのなら」という詩が、彼の最後の証言となり、遺言となった。この詩は三〇以上の言語に翻訳され、三〇〇〇万回も読まれた。

もし私が死なねばならぬのなら
君は生きなければならない
私のことを語るためだ
そして私のものを売って

一片の布と
糸を買ってほしい
（長い尾のついた白い凧を作るためだ）
ガザのどこかで子どもが
天を仰いで父親を待つ
炎の中で旅立った父親は
誰にも別れを告げなかった
自分の肉体にさえも
自分自身にさえも
君の作った私の凧が
空に舞い上がるのを見て
その子は一瞬、そこに天使がいる
愛を戻してくれると思うだろう

もし私が死なねばならぬのなら
それが希望を生み出すように
それを物語にしてほしい

アーティフは彼の観察や省察を、イスラエルによるインターネットや電話サービスの遮断のために送信が困難なことも多い中で断固として、ワシントンポスト紙やニューヨークタイムズ紙やネイション誌などの媒体で発表し続けた。

イスラエルによる砲撃が始まった最初の日に、オマル・アブー・シャーウィーシュという若い詩人・ミュージシャンが、イスラエル軍の砲撃で殺された。アーティフは、「赤外線レンズと衛星写真」によって彼とその家族を監視するイスラエル兵たちは、「私のバスケットの中のパンの数や、皿に載ったファラフェル団子を数えられるのだろうか」と疑ってみる。彼は、呆然として行き惑う大勢の家族の群れを眺める。この人々は住む家が瓦礫と化し、「マットレスから衣服を詰めたバッグ、食べ物や飲み物にいたるまで」を抱えてさ迷っている。「スーパーマーケット、両替所、ファラフェルの売店、果物屋台、香水パーラ、菓子屋、おもちゃ屋……すべてが消失し」焦土と化した光景に、言葉もなく立ちつくす。

「そこらじゅう血の海だ。子どものおもちゃの破片、スーパーの缶詰、つぶれた果物、壊れた自転車、粉々になった香水の瓶」と彼は書く。「そこはまるでドラゴンの吐く火焔に焼き焦がされた町を描いた、黒っぽい木炭画のようだった」

彼は一〇代の息子を親族の家に預けた。「パレスチナの理屈では、戦争になったら、家族は

ばらばらに分かれて泊まるべきだということになっている。そうすれば、たとえ家族の一部が殺されても残りの者が生き残るからだ」と彼は書く。「国連の学校は、避難民や家をなくした家族が身を寄せてどんどん混み合ってきた。国連の旗が自分たちを救ってくれると考えているためだが、近年の侵攻では、国連の学校といえども被害を免れるわけではない」

一〇月一七日の火曜日、彼は救援活動を手伝っていた。義理の姉フダーの家がイスラエルのミサイルに直撃され、一家のほぼ全員が死亡したのだ。ただ一人救出された二三歳の姪ウィサームは、両足と右手を切断する緊急手術が必要だった。

イスラエルのヘリコプターが投下するアラビア語のビラが空から降ってくる。そこには、ワーディー・ガザよりも北側にとどまる者は誰でもテロリストの協力者とみなされると告知されており、「イスラエル軍は見つけ次第、射殺してよいという意味だろう」とアーティフは書く。電気は止められ、食料も燃料も水も底をつき始める。負傷者は麻酔なしで手術される。鎮痛剤も鎮静剤もない。空爆の後で、彼は救援チームに参加する。コオロギのような絶え間ないドローンの音は聞こえるが、その姿を空に見つけることはできない。T・S・エリオットの詩の「壊れた心象の積み重なり」という一節が彼の頭をよぎる。負傷者や死者は「三輪車で運ぶか、動物に牽かせた荷車に載せて運ばなければならなかった」。

一一月二一日に、彼はガザ北部のジャバリア難民キャンプから脱出し、南部に向かうことを

決意する。息子と車椅子に乗せた義理の母親を連れた旅だ。彼らの一行はイスラエルの検問所を通過せねばならないが、そこでは列をつくる人々の間から兵士が無作為に男性や少年を選び出して拘禁する。

「道路の両側に沿っていくつもの死体が転がっている。腐乱して、地面に溶けつつあるようだ。すさまじい臭気だ。焼け焦げた車の窓から、一本の手がこちらに伸びている。まるで何かを求めているかのようだ――はっきりと、私から何かを。こちらには首のない死体、あちらには切断された頭部が転がっている。手や足や大切な身体部分がただ投げ捨てられ、腐敗するに任されている」。彼は息子のヤーセルに言う、「見るな。そのまま歩き続けろ」

彼の生まれ育った実家は空爆で破壊された。

「作家が育った家は、素材を汲みだす井戸である。私のどの小説でも、キャンプ内の典型的な家を描きたいときは、私たちの家を思い浮かべた。家具の配置を少し変えたり、通りの名前を変えたりしたが、ごまかしはよそう。それはいつだって、私たちの家だったんだ」と彼は書く。

イギリスでこの日記の第一版が電子書籍として出版された二〇二三年一二月二六日の時点で、アーティフはまだ息子とともにガザ南部に捕らわれたままだったが、今は脱出している。イスラエルはガザ爆撃を続けており、クリスマスも、新年も、その先までも、それは続いている。今この本［原書］が印刷に入っている二〇二四年二月前半において、死者は二万八〇〇〇人を超えている［五月現在では三万五〇〇〇人以上と報告されている］。

クリスマスの物語は、妊娠九カ月の貧しい女性が、夫とともにガリラヤの町ナザレにある家を離れることを余儀なくされる話である。占領者であるローマ帝国が人口調査を行ない、この二人に九〇マイル離れたベツレヘムで登録するよう要求したからだ。二人はベツレヘムに到着したが、泊まる部屋がなかった。そこで彼女は馬小屋で出産する。ヘロデ王は、マギから救世主が誕生したことを知らされ、兵士たちに命じて、ベツレヘムとその周辺の二歳以下の幼児をすべて探し出し、殺害させた。ヨセフは夢の中で天使に逃げるように警告され、夫婦と幼児は闇に紛れて脱出し、四〇キロ旅してエジプトに着く。

私は一九八〇年代の初頭、戦火を逃れてホンジュラスにやってきたグアテマラ人の難民キャンプにいた。村や家が焼かれたり、打ち捨てられたりした農夫たちとその家族は汚物と泥の中で暮らしていたが、自分たちのテントをカラフルな細長い紙切れで飾り、「幼児虐殺」を祝っていた。

「なぜこの日がそんなに重要なのですか」と尋ねると、

「キリストが難民になった日だからです」と農夫が答えた。

クリスマスの物語は、圧政者のために書かれたのではない。抑圧された人々のために書かれたのだ。私たちは罪のない人々を守るよう求められている。私たちは、占領者に抵抗するよう求められている。アーティフ、リファアト、そして彼らと同じように死の危険を冒して私たち

に語りかける人々は、この聖書の教えを反響させている。彼らが語るのは、私たちを沈黙させないためだ。彼らの言葉や映像を私たちが拾い上げ、高く掲げて世界の権力者たちに示すようにするためだ――メディア、政治家、外交官、大学、富裕層や特権階級、武器製造業者、ペンタゴン、イスラエル・ロビー団体など、ガザにおけるジェノサイドを取り仕切っている者たちに向けて。幼子キリストが今日横たわるのは、藁の中ではなく、コンクリートの瓦礫の中だ。悪は何千年経っても変わらない。善も同じだ。

クリス・ヘッジズ
米ニュージャージー州プリンストン

ガザ日記――ジェノサイドの記録

目次

序文——忘れない者の痛み クリス・ヘッジズ……3
本書に登場する人々……16
パレスチナ地図……17
1章——砲弾と爆撃……19
Day 1 2023年10月7日……Day 33 11月8日
2章——包囲網……193
Day 34 11月9日……Day 44 11月19日
3章——喪失と決心……249
Day 45 11月20日……Day 48 11月23日
4章——「休戦」……273
Day 49 11月24日……Day 55 11月30日
5章——戦争オーケストラ……309
Day 56 12月1日……Day 70 12月15日
6章——避難の民……373
Day 71 12月16日……Day 85 12月30日
あとがき……439
訳者あとがき——パレスチナ人をして語らしめよ 中野真紀子……443

＊本文中の［ ］は訳者による補足を示す。

本書に登場する人々

アーティフ・アブー・サイフ
：この日記の著者。ラマッラーの自宅から仕事でガザを訪れていたときに侵攻に巻き込まれる

ハンナ
：アーティフの妻

ヤーセル
：アーティフとハンナの息子

ヤーファ
：アーティフとハンナの娘

タラール
：アーティフの父

ムハンマド、イブラーヒーム、ハリール
：アーティフの弟

アワーティフ、ハリーマ、ナイーマ、アーイシャ、アスマー
：アーティフの姉妹

イスマーイール
：ハリーマの夫

マーヘル
：アーイシャの夫

アミーナ、サマー
：アーティフの異母妹

ムーサー
：アーティフの異母弟

ヌール
：アーティフの大叔母

ムスタファー
：アーティフの義父

ウィダード：アーティフの義母

ジュンマ
：アーティフの母のいとこ

フダー
：ハンナの姉

ハーティム：フダーの夫

ウィサーム：フダーとハーティムの娘

ウィダード：フダーとハーティムの娘、ウィサームの姉

友人

ビラール
：プレスハウスの支配人、ジャーナリスト

ファラジュ：アーティフの子ども時代からの親友。ジャバリアの隣人

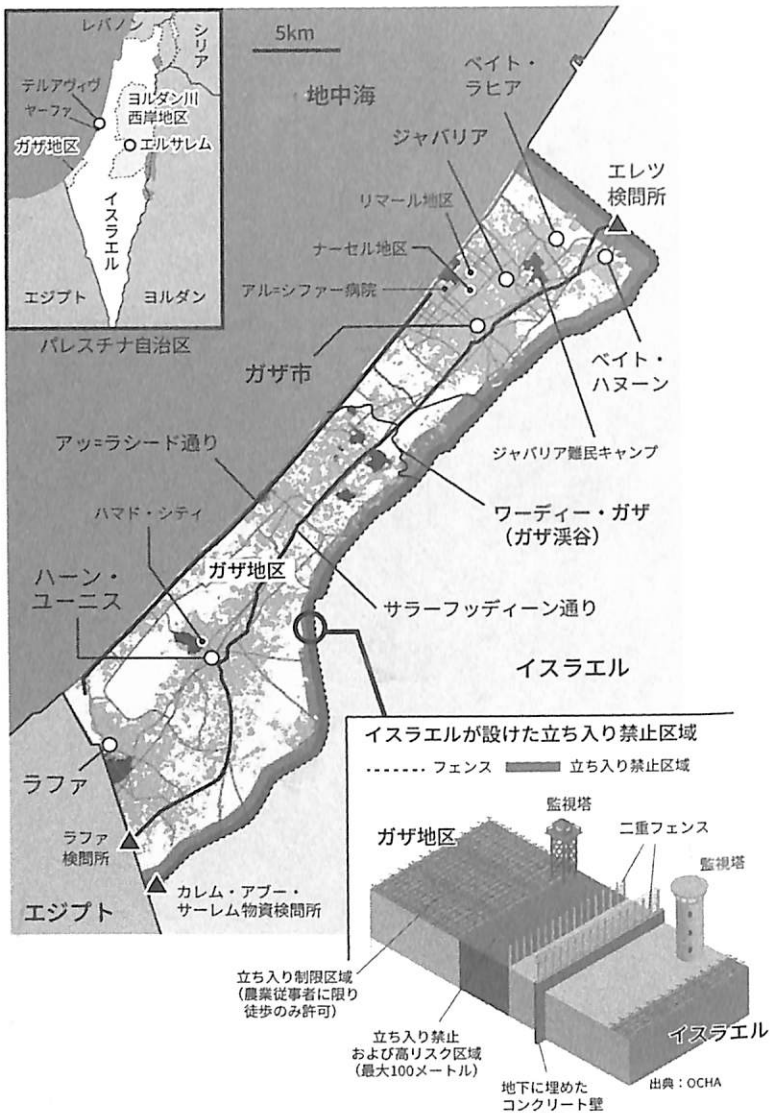
ヒシャーム：ジャバリアUNRWA学校に避難する

ヒクマット：通信社SAWAの編集長

マアムーン：ハーン・ユーニスに避難する

マフムード：ラファの赤新月社で働く

パレスチナ地図



あとがき

もしもこの日記を本として出版するようなことになったら、それは君に捧げるとビラール・ジャダッラーに言ったとき、まさか彼がこの世を去り、その本を手に取って読むことができなくなるとは思いもしなかった。私はアラビア語版のサイン会を、彼の愛するプレスハウスで行なうと約束していた。そのときの最後の会話を鮮明に覚えている。彼はプレスハウスの裏庭で私と向き合って座っていたが、隣人が自宅の屋根に残していったひとりぼっちの猫のことのほうが気になるようだった。自分の屋根から猫に餌を投げてやるため、早めに帰宅しなければならないと彼は言った。暗くなってからでは、それができない。ドローンに見つかってしまうだろうし、誰かが屋根に出て何かを投げるという光景は、彼らの攻撃スイッチを入れてしまうだろう。「どうやって水を与えるの？」と、私は半信半疑で尋ねた。彼は、水の入ったボトルのキャップをゆるゆるにして投げてやると、着地したときにキャップが外れ、水が屋根の表面にこぼれるのだと言った。「で、献辞の案と、本のサイン会については、どう思う？」と、私は本題に戻って彼に尋ねた。そして、彼がわざとその話を避けていることに気がついた。彼が私のほうを向

いたとき、その顔には、この本が出版されるであろう将来のある時まで自分がこの世にいるとは思えない、と書いてあった。

ビラールは、何万人ものパレスチナ人たちとともに死んでしまった。私は自分が経験したことを思い返すと、いったいどうやって生き延びてきたのだろうと不思議になる。義理の姉のフダーの家が爆撃され、彼女と夫、二人の男の子が死亡し、娘が身体の一部を失ったとき、私はそこに滞在していたかもしれなかった。また、いつも計画していたように、ビラールと一緒に南へ旅立っていたかもしれない。そうしていれば彼の隣で一緒に殺されただろう。他にも一〇カ所以上の場所が、攻撃されたときに私がいたかもしれないところなのだ。二〇一四年の「戦争」(このときも詳細に記録を残した)が終わり、和平が宣言されたとき、あるジャーナリストが冗談でこう尋ねた。「誰が勝ったんだ?」そのときの私の返事は「私だよ。私は生き延びただろう?」だった。今度の戦争が終わったときに、私が同じ返答をするかどうかわからない。私の損失はあまりにも大きい。

この日記を振り返ってみると、ここに残されていることを何一つ思い出したくないと自分が思っていることに気づく。戦争の前の生活がどんなだったかだけを覚えていたい。一回の食事から次の食事までどうつなぐかというストレスの日々は思い出したくない。これほど多くの親しい者たちが、みんな殺されたことも思い出したくない。私は彼らを自分の傍から離さず、まだここにいるふりをしたい。

今みなさんが手にしているものは、日記のつもりで書き始めたものではない。毎日これを書いたのは、何が起きているのかを他の人たちにも知ってほしかったからだ。自分が死んだ場合に備えて、日々の出来事の記録を残しておきたかったからだ。私は死の気配を何度も感じた。死が私の背後に不気味に姿を現し、肩越しに迫ってくるのを感じた。だからそれをかわす手段として私は執筆した。勝てないまでもそれに逆らう方法として、そして何よりも、気を紛らわす手段として書いたのだ。戦争は継続し、私は生き残ることしか考えられなくなる。死者を悼むことはできない。回復することもできない。悲しみは先送りしなければならない。今はそんなことを考えているときではない。しかし、この本の中で、私は自分が愛し、失ったすべての人々に会うことができ、彼らと話し続けることができる。この本の中でなら、彼らがまだ私とともにいると信じ続けることができる。

アーティフ・アブー・サイフ　二〇二三年一二月二〇日

Special Thanks

The publishers would like to thank: David Sue, Maaria Mehmood, Negar Azimi, Seth Maxon, Madjid Zerrouky, Luciana de Mello, Amagoia Mujica, Céline Lussato, Marco Imarisio, Jack Mirkinson, Rebeca González Izquierdo, María Rán Guðjónsdóttir, Shera Sihbudi, Haru Marui, Amy Caldwell, Tadeu Breda, Marcia Lynx Qualey, Asmaa al Ghoul, Dani Abulhawa, Delfina Llosa, Jeronimo Arambasic, Julia Pich, Makiko Nakano,Vibeke Har, Nadya Andwiani, Ayah Najadat, Tatiana Garcia, Dachiny Ewekengha, Meg Sears, everyone at Respond Crisis Translation, and especially Orsola Casagrande.

訳者あとがき

パレスチナ人をして語らしめよ

中野真紀子

アーティフ・アブー・サイフは、ガザ地区のジャバリア難民キャンプ出身の作家で、パレスチナ自治政府の文化相として通常は西岸地区のラマッラーに住んでいるが、たまたま息子を連れてガザを訪問中にイスラエルの爆撃が始まり、そのまま三カ月近くガザに閉じ込められ、親戚や友人たちとともにジェノサイドの恐怖を体験することとなった。

アーティフは早い段階から、日々の出来事を書きとめて外の世界に発信した。チャットアプリのWhatsAppやボイスメールを使って英国の彼の出版社に届けられた原稿は、ガーディアン紙やワシントンポスト紙など西側の主要媒体に掲載され、リアルタイムのジェノサイドの証言となった。まわりの者たちが次々と殺されていき、生死を分けるのはまったくの偶然、明日まで生き延びる保証はないという極限状況で描かれた戦時下の人間模様は、重大な一次証言として緊急に書籍にまとめられた。世界の一〇の出版社がこれに賛同し、世界的なキャンペーンに発展した。この一月に創業した地平社もその一員である。

アーティフは極めて優れた書き手であり、その才能がこの記録に惜しみなく発揮されている。ほんの数行の印象的な描写によって、その人物の人生がまざまざと浮かび上がり、その場所や建物の歴史や風情、そこに息づく人々の生活感が鮮やかに描き出される。それは多数の無名の人々が織りなす人間のドラマだ。だが、そのテーマは終わることない戦争を生きる人々の日常だ。彼らの大半にとって戦争と軍事占領は、生まれてからずっと続いている、人生のバックグラウンド・ミュージックなのだ。

アーティフ自身が、一九七三年の戦争（第四次中東戦争）の年に生まれ、人生とは戦争と戦争の合間に生じる一時的な猶予期間にすぎないと感じている。軍事占領の下では、人生の設計など無意味だ。すべての条件は占領者の気まぐれによって、いつ何時でも変更され、撤回されるからだ。人生どころか明日の計画さえも立てられない。不安定で、その場しのぎの、「今日を生きる」だけの人生は、途方もなく不条理で不公平だ。このような状況に屈服せず毅然と立ち向かうには、ブラックで辛辣なユーモアが欠かせない。その点でアーティフの文章はまさにこれぞパレスチナ人というべきウィットに満ちている。

だが、主体性を剥奪され、ドローンに監視されながら、命じられたままに生きる選択肢のない人生は、はたしてパレスチナだけのものなのか？　現代の日本で私たちが感じている不安や無力感と、どれほど違うのか？　もちろん彼らの恐怖は確固とした現実であり、私たちの不安は想像にすぎない。一般化することでパレスチナの悲劇を矮小化するつもりはまったくないが、

いろんな意味でパレスチナの状況は私たちが住む世界のグロテスクなカリカチュアのようにも思える。そんな中でも、生きることを楽しむパレスチナの人々、思いやりと愛情の交換に多大な時間を費やしている彼らの姿は、現代の私たちが失っているかもしれないものに気づかせる。長期の占領でネオリベ的な個人の成功が拒否された中だからこそ残っているのかもしれない、人生へのいつくしみだ。

ここでの人間模様は一人ひとりの人生の断片が多くを語る。個人というより社会集団が描かれているのかもしれない。難民キャンプの社会が持つ、集合的な記憶と意思。それは今回の戦乱が「ナクバの再現」であると見抜いている。イスラエルの意図は昔も今も一貫して先住民の一掃であり、「安全のために退避せよ」という警告はまったく信用できない。そのことは、みんなが知っている。わかっているからこそ、危険を冒しても命令通りに移動することに抵抗する者たちがいるのだ。第二のナクバは起こさせないと。

日記の中で、現実に起きていることを、七五年前の出来事と重ね合わせる記述が何度も出てくる。アーティフの大叔母ヌールは、一九四八年のナクバでヤーファの美しい屋敷を捨てて両親とともにガザに逃れ、難民テントでの生活を余儀なくされた人物だが、彼女は今回再びジャバリア難民キャンプの家を捨てて、ガザ南部に逃れなければならなかった。彼女の記憶が混乱し、四八年のナクバと現在の退避をごっちゃにして語るのを、アーティフは完璧な映画のモン

タージュ技法のようだと記している。

人々は「第二のナクバ」を起こさせないため抵抗するが、途方もない犠牲を払ったにもかかわらず、それを止めることができない。日を追うにつれて、どんどんまわりの人々が死んでいく。病院も学校もモスクも、社会インフラは意図的に破壊され、文化遺産のモニュメントも容赦なく破壊される。一つの社会と文化が計画的に抹消されていく様子を、それを守るべき役割の文化相が記述しなければならないのは皮肉なことだ。ジェノサイドを記述するとは、そういうことなのか。

そしてアーティフ個人は作家としての想像力の源泉である実家（home）を失った。物語を書く材料を汲み出す無限の井戸がなくなってしまったのだ。慣れ親しんだ縄張りともいうべき隣近所（ハーラ）も跡形もなく吹き飛ばされた。ジャバリア難民キャンプもガザ市も、ホームと呼べるところはことごく失われた。この絶望的な喪失感に対して、いったい何が言えるのだろうか。少なくとも「西側」の一員としてジェノサイドに加担させられている間は、何を言っても自己欺瞞になりそうだ。ならば、彼らに語らせようではないか。彼らを代弁するより先に、まず彼らの声に耳を傾けよう。

特に今、パレスチナ人の声をかき消そうとする動きが強まっている中で、このことは強調されなければならない。一〇月七日以降、ドイツや米国や英国などを中心に、パレスチナ人アーティストが参加する展覧会やシンポジウムが相次いでキャンセルされているからだ。また今現

在、世界じゅうの大学キャンパスでジェノサイドに反対する抗議が起こり、それに対して警官隊が導入され暴力的に鎮圧されている。まるで戦場が西側世界に広がったかのようであり、特にターゲットとされているのは言論と文化である。これまでにも増して、パレスチナ人の声を届けることが重要になっている。

この企画は地平社の発足と同時にスタートしたものだ。世界的キャンペーンで連携している一〇社には、米国のビーコン・プレス社も入っている。かつて『ペンタゴン・ペーパーズ』を出版したことで有名なこの出版社と肩を並べているのは大変に誇らしく、熊谷伸一郎社長の慧眼にあらためて敬服する。アーティフの日記について当初から注目されていた丸井春さんに編集を担当していただき、おびただしい人名や地名を整理していただいたことは、この短期間で出版に持ち込むことのできた最大の要因であり、感謝にたえない。また広島市立大学で教鞭をとられるパレスチナ文化の専門家、田浪亜央江さんが、アラビア語および現地情報のチェックを快諾してくださり、この貴重な現地ルポを正確なものにすることができたのは大きな幸運だった。大切な休日の時間を割いてくださったことに、心からお礼を申し上げたい。みなさんの思いに支えられ、このパレスチナ人の声が広く届きますように。

二〇二四年五月七日

中野真紀子

著者：アーティフ・アブー・サイフ（ATEF ABU SAIF）

小説家、作家。1973年パレスチナ・ガザ地区のジャバリア難民キャンプ生まれ。ビルゼイト大学で学士号、ブラッドフォード大学で修士号取得。欧州大学院で政治・社会科学の博士号取得。ヨルダン川西岸地区在住。これまでに6冊の小説を出版するほか、パレスチナ関連の執筆などを行なう。2019年からパレスチナ自治政府文化大臣。

訳者：中野真紀子（なかの・まきこ）

「デモクラシー・ナウ！ ジャパン」代表、翻訳者。訳書にエドワード・サイード『ペンと剣』（ちくま学芸文庫）、ノーム・チョムスキー『マニュファクチャリング・コンセント――マスメディアの政治経済学』（トランスビュー）、ナオミ・クライン『地球が燃えている――気候崩壊から人類を救うグリーン・ニューディールの提言』（共訳、大月書店）など多数。

協力：田浪亜央江

本書の収益は全額、パレスチナ支援に取り組む以下3つの団体に寄付されます。
Medical Aid for Palestinians, the Middle East Children's Alliance, and Sheffield Palestine Solidarity Campaign (Khan Younis Emergency Relief)

ガザ日記 ジェノサイドの記録

2024年5月29日――初版第1刷発行

著者……アーティフ・アブー・サイフ

発行者……熊谷伸一郎

発行所……地平社
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1丁目32番 白石ビル2階
電話：03-6260-5480（代）
FAX：03-6260-5482
www.chiheisha.co.jp

デザイン……赤崎正一

印刷製本……中央精版印刷

ISBN978-4-911256-06-0 C0036

地平社
乱丁・落丁本はお取りかえします。

アーティフ・アブー・サイフ（ATEF ABU SAIF）
小説家、作家。1973年パレスチナ・ガザ地区のジャバリア難民キャンプ生まれ。ビルゼイト大学で学士号、ブラッドフォード大学で修士号取得。欧州大学院で政治・社会科学の博士号取得。ヨルダン川西岸地区在住。これまでに6冊の小説を出版するほか、パレスチナ関連の執筆などを行なう。2019年からパレスチナ自治政府文化大臣。

訳：**中野真紀子**（なかの・まきこ）
「デモクラシー・ナウ！ジャパン」代表、翻訳者。訳書にエドワード・サイード『ペンと剣』（ちくま学芸文庫）、ノーム・チョムスキー『マニュファクチャリング・コンセント――マスメディアの政治経済学』（トランスビュー）、ナオミ・クライン『地球が燃えている――気候崩壊から人類を救うグリーン・ニューディールの提言』（共訳、大月書店）など多数。